



妄想探偵  
VS  
捏造探偵

朝飯拔太郎

「貴女、だったのですね」

探偵は厳かに、そして哀しげに、犯人――彼女に話しかける。

「許せなかったのでしょうか？ 彼の事を。だから殺した」

こくりと肯く彼女は、もはや項垂れて、ただ探偵の話に耳を傾けている。探偵と一緒にいた少年が彼女の側に近づき、彼女の肩にやんわりと手を置いた。

「彼の喋り方には独特の癖がありました。私の記憶が確かならば、それは、日本でもあまり知られていない南のある島のものだ。地元の間人は畏敬と羨望を込めて『神の島』と呼んでましたか。そして、貴女にも僅かながら、同じ訛りがありますね。おそらく貴女と彼は同じ島で生まれ育った。人口の少ない島で、兄妹同然にね」

彼女は驚いて顔を上げる。探偵は彼女に笑顔を向け、やんわりと彼女が何か言うのを制した。

「貴女が、一度だけ、興奮して、彼の事をお兄ちゃんと呼んだことがありましたね。それを覚えていたんです。貴女のお兄ちゃんは、貴女より先に島を出た。島の外で、いつか会おう。そう約束して。しかし、再会した二人はかつての兄妹ではなかった。街の生活に馴染めず、仕事もうまく行かない彼は、やがて闇に堕ちた。貴女は、そんな彼を見ているのが辛かった。『神の島』には、『神人』という風俗があります。神に愛された人という意味で、言わば島の導き手として期待される若者に贈られる称号です。この称号は、島では未だ実質的な効力を持っています。彼の腕には鳥の形の刺青がありました。これは『神人』にのみ彫られるものです。彼は、『神人』だった。だから、貴女は、『神の島』の間人として、彼を裁いたのですね。神の島の間人という貴女と、彼の妹としての貴女、二人の貴女は激しくぶつかり合い、貴女を突き動かし、この哀しい事件が起こってしまったと考えます。でもね、詩織さん。彼は死の間際まで貴女の事を想っていたのですよ。警察が最後までわからなかった彼のダイニング・メッセージは、貴女を守る神の呪いだったのですから」

黙って聞いていた彼女は、おずおずと探偵に話しかけた。

「あの……私も彼も大阪生まれで……私は彼が浮気してたんでカッとなって殺しちゃって……あと私の名前、信子なんですけど」

探偵は手の平を彼女に向け、にこやかに笑った。

「お気になさらず、全部妄想ですから」

そして、探偵は彼女の知らない彼女の過去に関する演説を再開し、どうしていいかわからない信子は、傍らの少年に助けを求めた。少年はキラキラと目を輝かせ探偵を見ている。

「あの人は一体……」

「ご心配なく。いつものことですから大丈夫。絶好調時の先生は、事件そのものを妄想した事があります」

「なんだか怖いわ……」

信子がいろいろ後悔し始めたそのとき、ドアが乱暴に開き、探偵の演説は中断された。

「相変わらずだな、想蔵」

同時に響いた野太く低い声に、探偵の顔が初めて曇った。

黒いスーツの屈強な男達を従えて、その男は部屋に入ってきた。そして、探偵の前に立つ。

「いや、今は亡女相心と名乗ってるんだったかな」

「捏蔵さん……」

睨みあう様に、探偵と男は対峙した。

「あれは、まさか膳部捏蔵……!？」

少年が驚きの声をあげた。

「誰ですか（その変な名前の方は……）」信子が少年に聞く。

「膳部捏蔵。またの名を捏造探偵。事件解決率100%の探偵です。しかも手がける事件は迷宮入り一歩手前の難事件ばかり。でも」

少年は苦々しい顔で言葉をきった。

「でも？」

「捏造探偵の通り名の通り、彼の捏造推理は、彼の推理のままに真相を捏造するという反則ギリギリの残虐推理……。『真実は常に俺が創る』と公言して憚らない彼は、探偵界でも異端児として恐れられています」

「ギリギリというかアウトでしょ、それ。いいの？」

「まさか、先生と知り合いだとは……」

ゴクリと唾を飲み込む少年。それから二人は黙って、対峙する二人の探偵を見守る。

晴れていたはずの空が、にわか曇り始めた。

とうとう降りだした雨が、窓を叩き始めた。二人の探偵が対峙する部屋の中は、ただ雨音だけが存在するかのように無音である。それはほんの十数秒の間だったが、そこにいた誰もが、数分に及ぶ沈黙を体感している。

膳部捏蔵——捏造探偵が、その沈黙を破る。

「さて、さっそくだが本題に入らせてもらう。良いところだったようだが、この事件については、俺が預かることになった。そちらには申し訳ないが、今回は引き取ってもらう。もちろん報酬はこちらから払おう」

妄女相心——妄想探偵は苛立たしげに答える。

「何を仰っているのかわかりません。ご覧の通り、この事件は既に解決しています」

「真実は明らかにされていない。それとも、お前の甘っちょろい夢物語が真実であるとしても？」

捏造探偵は、尊大な態度で、妄想探偵への敵意を隠さない。

しかし、妄想探偵も一歩もひかない。

「真実とは、各人の胸の中にあれば良いもの、明らかにして公表する事に意味があるとは思えません。それも、貴方の創る偽の真実など」

「真実というものの価値は、自己満足と安心だ。あるべき物はあるべき形に、必要と安心と僅かばかりの金の為なら、俺は真実を創る事を厭わない」

「同意できません」

「だろうな」

雷鳴が響いた。雨はますます雨足を早め、まだ止みそうに無い。

捏造探偵は、うって変わった優しいトーンで信子に声をかけた。

「信子さん。私は貴女の御祖父様に頼まれて、ここに来ました。貴女の御祖父様はとても心配しておられますよ」

突然矛先を自分に向けられて信子はひどく驚く。そして祖父の名を聞くと、信子は俯き、唇を噛み締めた。

再び、妄想探偵に向き直り、捏造探偵は続ける。

「お前も知っているだろう？ 袋小路財閥を。彼女はその関係者だ」

関係者という言葉に、妄想探偵は目を細めた。

「の、信子さん、お嬢さんだったのですかっ！ み……見えない」

少年は驚いて素の声を上げる。

「慎ましくて驕った様子が全く見えない、という風に解釈するわね……そう、私は彼と駆け落ち同然にこの街に来たの。お爺様のあの街は、私たちには息苦しくて……」

信子は苦い過去を思い出したように苦しげな声を出した。

「信子さん……僕は金持ってなさそうという意味で言ったのですが……」

「それを流したのよ、少年君。わからなかったかしら。それともわざと？」

「犯人にかける情はないっすから、俺！」

「ああ、よい心がけね……」

少年のにこやかな笑顔を見て、信子は二度目の殺意を覚えた。

妄想探偵は、表情を険しくした。

「見えてきましたよ。貴方は詩織さんのお祖父さんから依頼されたのですね。『孫が容疑者にされそう。事件を解決してくれ』と。この場合の解決とは、真の犯人を見つける事ではなさそうですが」

「真犯人を見つけることさ。おい」

捏造探偵は、後ろの黒服に合図する。黒服の一人が部屋から消え、直ぐに、両手を縛られた女性を連れて戻ってきた。女性は猿轡をされ、虚ろな目でこちらを見ている。

「彼女がこの事件の犯人だ。巻駒玲子。24歳。ドラッグの売買で、被害者ともめた事があった。重度のジャンキーで、再びドラッグを狙って被害者を襲ったというわけだ。被害者の死亡推定時刻にアリバイはなし。ふらつきながら、逃げ去る様子を近所の住人が見ている。先程、自白も手に入れた。もはや推理するまでもない」

「それが、筋書きですか」

「事実だよ。これが真実になる」

妄想探偵が強く奥歯を噛み締める。

「兄さん。貴方は……」と小さく呟いた声は誰にも聞こえない。

優しく落ち着いた声で、捏造探偵は信子に語りかける。

「袋小路信子、さん。貴女は被害者と会ったことはない。もしかして貴女は生まれ育った街から出た事すらない。被害者と会った事がなく、この街に来た事のない貴女が、この殺人に関係する理由がない。それで、いいですね」

「え、わ、私」

展開についていけず、信子は答えられない。だがそれまで彼女の脳裏を占めていた監獄の中のモノクロな映像は、捏造探偵により再び色づき始めている。捏造探偵は、笑顔で話を続け、信子を圧する。

「そう、貴女のことです。全ては悪い夢だったのです。御祖父様も既に怒ってはおられません。貴女が望むなら、別の街で新しい生活を始める事も約束しておられます。手配は私がしましょう。もちろん、ある程度の制限はつきますが、刑務所に比べるまでもないでしょう。全ては夢。貴女は何もしていない。次に目覚めたら、貴女はベッドの上で、気になるのは今日の占いと、朝ご飯を食べるか食べないか、シャワーを浴びる時間があるかどうか」

「そう……なの、私、何もしてな……」

信子が暗い笑顔を浮かべ、捏造探偵が口の端を大きくあげたとき、

「騙されちゃいけないッ！」

妄想探偵の鋭い声が、捏造探偵と信子を中心に形作られていた部屋の空気を切り裂いた。信子は受け入れかけていた甘い現実から瞬間的に引き戻されて、荒い息をつく。

雨音が再び部屋を支配した。雨は今や豪雨となり、安物のガラスは悲鳴をあげている。

妄想探偵は、部屋に居る全員に向かって、力強く言った。  
「私の推理を聞いて頂きます」

今や、捏造探偵を含む全員が、妄想探偵を見ている。探偵は臆することなく、柔らかな声で、信子に語りかける。

「詩織さん」

「の、信子です」

「いいえ。詩織さんでいいのです。詩織でも玲子でも亜里抄でも由香里でも何でも良い。そんな小さなものに貴女は縛られる必要はないのです。ですが！」

静かな妄想探偵の迫力に、全員が気圧される。捏造探偵ですら、苦々しい顔つきのまま、口を挟まない。妄想探偵のリズムが、激しい雨音のそれに近づいていく。

「貴女は捨ててはならない。貴女が彼を殺してしまうほどの感情を彼に対して持っていたというその事実を、決して捨ててはならない。そこには貴女も気付いていないドラマがあったはずなんです。少なくとも、あなたの脳内では百億回以上の彼とのドラマが日常的にシュミレートされていたはずだ。平行世界は、この世界の外にあるのではなくて、我々の頭の中にある。そこにおいて貴女の未来も過去も現在も自由であり平等なのです。ですから、貴女は彼との思い出をなかったことにしてはならない。何故なら、そこから世界は生まれるからです。彼と暮らした日々を思い出したくない過去にしてはならない。そこからは妄想は生まれません」

そして、探偵の推理は怒涛のリズムと熱を帯びてゆく。

「島から出てきた貴女は、彼のアパートにたどり着く。都会の喧騒と汚らしさと、そこから出てきた暗い目をした男が、貴女の笑顔を曇らせる。だが、しかし。貴女を見た彼の表情は、汚泥の中に光を見たように、恋い焦がれる少年のように、輝いていたのではなかったでしょうか。哀れにも助けを求めると貴女には見えたのではなかったでしょうか。だから、貴女は決意した。彼を救うと。彼もその時確かに見たのです。二人で生きる明るい未来を」

信子は震える声で反論しようとした。

「だから、私は……」

「だから、私は決意した。この人と共に生きていくと。……思えば、始まりはいつだったのでしょうか。島の長であり、理解のあった祖父母と、優しい両親に育てられ、明るく幸せに育った貴女と、それとは逆に早くに家族を亡くし天涯孤独の身で生きる事になった彼、強さと優しさと、二人がいれば生きていけると誓ったあの日と、再び都会の街で貴女と彼が再会した日、運命は貴女の前に二度同じ状況で出現した。金がなかろうと、人が冷たかろうと、街が貴女達を拒絶しようと、あの頃の貴方達は未来を持っていたのです」

「ちが……う、お金は、くすねてきたし、毎日、適当に遊んで、喧嘩して」

「二人で？」

「……二人で」



「二人で逃げた。二人で暮らした。二人で遊んだ。二人で喧嘩した。二人で食べた。二人で眠った。二人で夢みた。二人で。点と点を真っ直ぐに結べば一本の線になります。ですが、グニャグニャと曲がった線ならば無数に描けます。貴女達は既に無限を手に入れている！」

「わからない……全然」

もはや、少年にすら、師である探偵の言っている事が理解できない。ただ、雨音よりも強く激しいリズムで、探偵は信子を覆いつくそうとしていた。

そして、信子は、

「私は……誰」

混乱していた。一種の呪術的なトランス状態を引き起こし、信子の中で何かが瓦解し、再度構築される。そして。

雨がふいに止んだ。奇跡のように窓から光がさした。信子は顔をあげて光を浴びる。

「貴女は……」

さらに言葉を連ねようとした探偵を手で制止し、はっきりした声で信子は言った。

「私は詩織……神の島で育ち、人の島で、愛する人を殺した女」

少年はその声を聞いて震える。その声は、それまでに聞いた信子の声ではなかった。

「Q.E.D.」——おめでとう詩織さん、探偵は信子＝詩織に軽く会釈した。

「おめでとうございます。信……詩織さん」

少年は、詩織を祝福する。詩織の顔は、見違えるほど明るい。

「少年君。ありがとう。私、ふっきれちゃった気がする。残りの人生は、自分の罪を償うために生きるわ」

「……辛いですよ」

少年の問いかけに、詩織は力強く肯いた。

「大丈夫、私の胸の中には、あの人がくれた真実があるから」

詩織は、とても晴れやかな、それでいてどんよりとした眼で笑った。少年は、それを見て肯く。やはり、先生は間違っちゃいない。

「化粧は重ねても、罪を重ねるような事はしないでくださいね」

「どうしよう。今重ねそうだわ」

詩織はそう言って笑った。少年は少し、詩織から距離をとった。

「それで救ったつもりか」

低く重い声が部屋の空気を割った。それまで黙っていた捏造探偵は大きく舌打ちし、妄想探偵を睨みつけた。

妄想探偵は、勝ち誇る事も無く、哀しい目をして捏造探偵を見た。

「想いが人を動かし、生かす事もあるのです。兄さん、貴方だって、あのとき、彼女の最期を見て、それがわかったはずだ」

「あれは、もう『なかった』ことだ。」

「それは誰の為の真実ですか」

捏造探偵は、妄想探偵に背を向ける。

「兄さん！」

「妄想は程々にな、想蔵」

捏造探偵は、それ以上妄想探偵に喋らせなかった。

「今回は引き下がろう。だが、貴様の作り出した妄想などでは世間は偽れん……特別だ。その女の経歴は俺が創っとく」

それだけ言って、捏造探偵は黒服の男たちを引き連れ、部屋を出て行く。

残された妄想探偵は、彼の出て行ったドアをいつまでも眺めていた。

詩織が立ち上がり、窓を開けた。明るい陽射しと共に冷たい空気が部屋に入り込んだ。

## エピローグ

---

痴情のもつれによる殺人は、妄想探偵の筋書き通りに捏造され、本当にあった愛の話として、書籍化、映画化が決まっている。少年が持ってきたそのニュースを聞いても、妄想探偵は興味を示さずに、窓の外をずっと眺めていた。少年はそれが少し不安であった。

「しかし、負けた相手の為にここまでやるなんて、一応筋が通った人なのではないでしょうか。いわばボランティアでしょう？」

妄想探偵は、少しだけ少年を見ると落ち着いた口調で言った。

「いや、あの人は負けてません。報酬はもらっているでしょう。どうやら捏造さんのクライアントは、詩織さん自身には興味がなかったようです。ただ、自分の名前が出る事を嫌っただけでしょう。縁が切れるのなら、そちらの方が都合が良かったのでしょうかね」

そして妄想探偵の視線は再び空に向かう。

少年は思う。過去、彼と捏造探偵との間に何があったのか。妄想探偵が名乗る奇妙な名前。亡女相心。亡き女に相對する心？ それとも、相容れぬ心？

少年にはわからない。なぜ二人の良く似た男が決定的に道を違えてしまったのか。少年にはまだ、わからない。

でも、と少年は思う。多分、やっぱり、もしかして、全部妄想なんだろうなあ、と。